

《7月例会報告》

追悼集に全力を

庄司先生が亡くなってから初めての全面研でしたが
追悼集について大筋の方向が決まりました。

例会参加者：伊東、植垣、小田、尾崎、滝北、武田、花田、向井、山田、徳永

庄司和晃追悼集

の編集委員決まる

本来ならば「庄司先生を励ます冊子」あるいは「米寿記念論文集」の企画になったはずが「追悼集」の話し合いになってしまい、参加者一同今ひとつ力が入りませんでした。

いろいろと案が出て話し合った結果として以下のようにになりましたので報告します。

- ・写真なども掲載し、レイアウト編集などは専門の出版企画社に依頼する。
- ・一周忌をメドに完成させる。
- ・原稿依頼先候補

全面研、成城学園職員、仮説実験の関係者、大東文化大関係、看護学校関係者など以上のイメージで次の4名の方が企画編集を担当します。

- ・企画編集担当

小田、植垣、向井、武田

なお「しのぶ会」を全面研で準備すると

して徳永が担当することになりました。

また新盆の墓参について小田さんから話がありました。希望される方は小田さんにお問い合わせを。

全面研の今後について

全面研の今後についても様々な意見が出ましたが、とりあえず追悼集発刊としのぶ会の運営に力を入れようということで継続して話し合うことになりました。

なお、事務局に寄せられた意見をダイジェストで紹介します。

石毛さん：「全面研」が地元入間の「実践」の中で生かされています。」との前置きのあと「認識論をこえた身体論、行動論へと（社会的運動として）のぼして欲しいですね」とのことでした。

今沢さん：「（庄司先生に）主体性を常に持つように指導してもらって来ました。」
「レポートの発表者は主人公になれるという正に主体性実現の研究会」「今後の全面研もこういった形式を維持して」いければよいとのことでした。

篠原さん：「例会を年2回ぐらい、レポート発表も続けていきたいと思います。」それだけでなく「例えば死の教育についての講演会を開くとか、より広く、深く「庄司学」を学ぶ機会を計画していく必要を感じます」

小林さん：「(メールにて)当日のみなさんのご意向にお任せします。」とのことでした。

《当日紹介できなかったメッセージ》

道岡さん：「庄司先生の残された「自己流を見つけなさい」という強いメッセージ…。この言葉は会員一人ひとりに全面研の暖簾分けを促したのではなく「一国一城の主になれ」という檄であると、僕は思います。」世相史研も全面研であり、花田さんのように一人でじっくりと考えて生きていることも全面研であり、全国各地には個人で庄司先生の教えを大切にしながら実践している方がたくさんいるということを踏まえて、自らが主宰する「ブラックラブ」(会員4名、向井さんを含む)も全面研とくっついています。「定例会の中で庄司和晃研究をすると聞きました。参加したいです。参加させて下さい。庄司先生の考えたことを自分の中で深化させたいです。そして、それが次の世代を担う人のためになれば…。」

長谷川さん：「雑駁に言えば、庄司認識論は「超優れた教育実践者である庄司さんの“観察眼の体系”というべきもの」であると考えます。それ故に教育実践がベースになっており教育実践の構想にも検討にも使い勝手がよいのですが、教育実践的な認識の持つ特殊性・限界性(教育実践ならなおさら)を考慮せずに一般化できないと思います。」この指摘は重要です。学校のというものの足場が政治や国家の影響下におかれているという現実を見ないで学校だけで教育を語るのは片手落ちではないかという指摘です。

「今教育に問われていることは、まさにこのことだと思います。社会的・経済的・政治的な観察の目を見開いた時に、庄司認識論がそれにどう対応できるのかを、示すことが必要ではないでしょうか。教室実践的なかたちのままで庄司認識論を引き継いでも、発展的な展開は望めないのではないかと懸念します。」

このほか、長谷川さんからは庄司理論への信仰的な対応ではなく批判的再検討によってこそ全面研の将来はあるとの指摘がありました。これは石毛さんの意見とも通底するように感じました。

例会レポート報告

①滝北利彦「自前の介護の原則を見つけようぜ！」

コトワザを通して自前の介護観を見つけようとする滝北さんの熱い庄司和晃オマージュ。固定通念に縛られがちな現場で、～ばかりとは限らない、という法則性に介護観が収斂していくが、向井さんがそれもそうとばかりはいえない、という弁証法的なつつこみになるほどと思った次第。

②徳永忠雄「柳田国男の道德観の使い方」

戦後の教育を立ち上げるに際して柳田が言及している道德観は、道德はもともと共同体が認めあった価値観から生まれたもので、上からこうあるべきものであると規定したものでないとする柳田の視点を「社会科の新構想」「国史と民俗学」および報徳社と柳田の関係から読み解いた。

柳田国男の教育への実践を最後まで言及していた庄司先生の感想が聞けないのが無念。

■次回例会予定

10月3日(土) 成城学園 14:00